

『アリストテレスの神学』から 古代末期の始原論への遡源

堀 江 聡

I 遡源の起点

『アリストテレスの神学』(*Uthulūjiyā Aristāṭālis*)とは、第一に9世紀にキンディーを精神的指導者とするバグダードの哲学者集団で成立したアラビア語文献を指す。この流布版『神学』全10章はプロティノス(205-270)の『エンネアデス』第4～6論集の翻案である。第二に、内容に関して流布版との等閑視しえない相違が認められ、形式上も14章の長大版『神学』がある。16世紀の二種の羅訳で伝承された長大版には、その約3/4のユグヤ-アラビア語断片も20世紀に発見された。旧レニングラードでボリソフにより30年に、再び同所そしてオックスフォードとニューヨークのカイロ・ゲニザ写本のうちから新たな断片が80年にフェントンによって発見された¹⁾。だが、長大版はフェントンによるアラビア語原典校訂の完了を世界的にも鶴首して待つのが現状ゆえ今回の研究の射程外にある。それが許される別の理由は、流布版が長大版に先行するという説が大勢を占めるからである²⁾。従って長大版の研究は、本研究とは逆向きに時代を下る場合、『生の泉』で著名なイブン・ガビロールの中世ユグヤ思想など後代に与えた影響史の考察の際には貢献度が高くなる。

明白に認知されている限りで流布版には文体面・術語面で類似の二兄弟、『ギリシアの賢者の言葉』と伝ファーラービー『神学論攷』がいる³⁾。両論攷は流布版と相俟って原『神学』を想定させる。いずれも『エンネアデス』の翻案であるが、互いにほとんど重複していないゆえ原『神学』がある時点で三者に分裂したとみなすのが妥当である⁴⁾

原『神学』の成立はプロティノス著作集の九篇集的編纂が前提される以上、ポルフュリオスが上限となる。流布版の序文には、「ポルフュリオスによるタフスィール（註釈？）⁵⁾、……イブン・ナーイマがアラビア語に訳し、……アル＝キンディーが修正を行なった」⁶⁾とあるので、三人の関与の程度が論議されたのは当然であるが、伝「アリストテレス」、伝「ファーラービー」からして虚偽であるから額面どおり受けとることはできない⁷⁾。シリア語版介在の論拠にも一理あるし⁸⁾、『神学』（以後「アリストテレスの神学」「神学論攷」「ギリシアの賢者の言葉」三者を一括して呼ぶ）にみられる一神教的立場の母体を、古代末期アレクサンドリアの新プラトン主義的キリスト教徒フィロポノス等に認める案も消去されたとは言い難い⁹⁾。とはいえ、イブン・ルシュドの先駆者さながら大中小の手引きを『エンネアデス』に作成したと自己申告するポルフュリオスに『神学』のルーツを求めるのは自然な成りゆきであった¹⁰⁾。それに輪をかけたのが、万物の始原理解をめぐる『神学』に散見される非プロティノスの？にしてポルフュリオス的思想である¹¹⁾。今回は『神学』の書成立の謎解きのなかでもこの書名に悖らない始原論という根本主題に焦点を絞ることとし、とりわけアドによってポルフュリオスに帰された『パルメニデス註解』との連関の可能性を測ること¹²⁾、『エンネアデス』の始原論との異同を見究めることを主眼としたい。まず、『神学』において体系の頂点を冠するものの属性いわゆる神名を第II節で列挙する。第III節で『パルメニデス註解』の始原理解を瞥見し、「ポルフュリオス」の始原が『神学』のそのモデルであった可能性を探る。第IV節ではプロティノスの始原論の一解釈として『神学』が成立しうるか推し量り、結びとして始原論のイアンプリコス-ダマスキオス流変奏にも思いを馳せてみたい。

II 『神学』の始原表示一覧

〈A群〉

「第一原理」（167.3）、「生命と知性と実体とそれ性の源泉」（182.3）、「一なる始め」（20.10¹³⁾）、「事物の始め」（134.5; 180.16¹⁴⁾）、「一切の事物の始めにして

終り」(139.4)¹⁵⁾、「第一のもの」(62.14-15; 177.17; 18; *bis* 178.2; 4; 15; 16; 180.1; 182.6; 183.11; 12-13; 22; 188.12; 189.15)¹⁶⁾、「端的にそのものである高次のもの」(174.6; 8)、「摂理の長」(66.9; 67.3; 5; 105.3; 120.4)、「真に求める者に諸善と徳を注ぐ者」(114.6)、「あらゆる事物の原型」(163.4)、「一者」(75.4; 113.12; 135.14; 148.13; 14; 18; 170.18; *ter* 177.3; 4)¹⁷⁾、「第一の単純なもの」(176.5; 7)¹⁸⁾、「もろもろの全体性の全体」(177.20)、「純粹善」(9.9; 26.10; 27.6; 183.6; 194.3; 5)¹⁹⁾、「美のきわみにある第一の美」(140.15)

〈B群〉

「第一原因 (‘illah)」(6.7-8; 34.6; 36.18; 51.7; 8; 69.1; 87.4; 89.10; 11; 95.3; 130.5; 6; 7; 9; 15; *bis* 16; 131.4; 11; 13; 137.11; 138.17; *bis* 139.4; 174.11; 12; 177.8-9; 10; 21; 185.14; 16)²⁰⁾、「創出者」(113.16; 135.12; 140.1; 148.10; 188.13; 189.12)²¹⁾、「第一の創出者 (mubdi‘)」(89.6; 6-7; 94.3; 105.3; 114.15; 119.12; 120.6; 7; 138.16; 147.10-11; 180.21; 22; 181.5; 10-11; 185.5; 6; 188.3; 4; 7)、「あらゆる刻印と知性の創出者にして守護者」(189.12)、「創出者にして完成させる者」(52.5)、「数の作り手」(112.17)、「創造する本質」(148.9)「諸力の力にして、諸力の創出者たる第一の力」(148.2)²²⁾、「力 (充溢)」(177.10; 11; cf. 156.16-17)、「造物主」(bāri‘, 10.9; 26.8 et passim; 51.11; 65.4; 9; 14; 66.4; 5; 13; 68.12; 84.18; 105.6; 108.10; 12; 14; 15; 16; 148.17; 161.2; 162.5; 15; 163.2; 181.15; 17; 19; 182.2; 5; 6; 20; 183.1; 183.3)²³⁾、「創造者」(26.8; 27.7)、「第一の活動者 (能動者・制作者) (fā‘il)」(27.3; 51.15²⁴⁾; 18; 52.4; 62.4; 6; 68.4; 5; 8; 71.12-13; 95.16-17; 98.12; 130.20; 139.7; 140.12; 14; 15; 16; 161.5; *bis* 174.20; 175.2; 6; 7; 177.13; 179.14; 16; 22; 23-180.1; 184.5; 7-8; 11; 187.4; 6; 7; 16; 17-18; 189.11)、「活動者 (能動者・制作者)」(184.13; 185.12; 187.14; 194.6)²⁵⁾「光」(119.13)²⁶⁾、「中心」(130.18)

〈C群〉

「真なる第一の存在(者) (anniyah²⁷⁾)」(26.8; 27.5)²⁸⁾、「第一の存在(者) (al-ann)」(119.17; 120.6; 156.8; 187.11; cf. 119.14)、「存在(者) と 実体 と 叡智 が一つのもの」(156.9-10)、「かの第一の実体」(159.7)²⁹⁾、「かの高き本性」(26.

12), 「第一の叡智 (ḥikmah)」(67.6-7;156.7;15;157.1;158.13;159.5;9-10)³⁰⁾, 「自己の本質を見て知っている」(175.14), 「第一の創出者は世界を見る³¹⁾, というのも世界の創出者だから」(180.22-23), 「あらゆる知の彼方の知 (‘ilm)」(175.14)³²⁾, 「第一の知者 (‘ālim)」(175.19), 「第一の智者」(67.8), 「かの知性」(175.10; cf.177.21), 「第一の知性は, ……諸事物を感覚し, ……直知する」(179.12-13)³³⁾, 「真に可知的なものである第一のもの」(179.1; cf.bis 179.7)³⁴⁾, 「生けるものどもの生命」(177.21)

<D群>

「知性の彼方の (fawqa) かのもの」(56.7)³⁵⁾, 「一切の多なる事物に先行する (qabla) もの」(112.17)³⁶⁾, 「いかなる面でも二元性も多性も含まないもの」(134.8-9; cf.113.21), 「いかなる事物も必要とせず, いかなるものの獲得も求めない」(135.5-6), 「あらゆる種類の運動から静寂で確乎としている…」(175.2-3), 「知性よりも高く³⁷⁾高貴な別の本性」(180.4)³⁸⁾, 「媒介なきもの」(178.5-6)

<E群>

「あらゆる本質の彼方の本質」(175.14), 「あらゆる知の彼方の知」(175.14)

以上から指摘できることは第一に, プロティノスで頻出する「一者」「善」など肯定的始原表示を含むA群と並んで, 始原が下位のものを創出する作出因の側面を強調したB群が顕著である点である。『神学』が好む神名は「第一原因」「第一の創出者」「造物主」「第一の活動者 (能動者・制作者)」であると言えよう。第二に, D群の除去の道, E群の卓越の道で, プロティノスと同様, 始原の超越性が表示されてはいるが, B群の強調に比例してその効果は薄められていると思われる。第三に, C群では始原に対してふつう一者の次の知性の段階で初めて容認される「存在(者)」「知」「生命」が遠慮なく適用される点である。「生命」は一度だけなので攔くとしても, τὸ ὄνとはプロティノスの理解では, 分節化され諸形相を内蔵するものを指すのが最も一般的な用例であるから, 一に統合された多, 「一多」である。また知性は主客の二者に分裂する

うえ、知られるものがイデア的原型の多であり、さらに華厳の一即一切・重々無尽の世界を現出するから、一そのものとは到底言えない。従って、体系最高位の一者に存在者、知性を重ね合わせることは教科書的プロティノスとは袂を分かち、そこで問題は、第三の一目瞭然の相違が何に由来するかということになる。第一、第二の点は第三点に連動して生ずるとも考えられるからである。つまり、一者が存在者と知のレヴェルにまで降格したとするならば、始原がわれわれに“近づいた”とみることができ、否定的言明を連ねる効果の減少は理解できるし、作出因の強調は「典型的存在者を直知し、下位のものを創出する始原」と容易に同調するからである。

III 旧トリノ蔵パリンプセスト『パルメニデス註解』

『エンネアデス』的始原把握とのずれを説明するためにもち出された仮説は、『神学』がポルフェリオスの色濃き影響下にあるとする見方である。ポッピオの修道院出自のパリンプセスト『パルメニデス註解』³⁹⁾をポルフェリオスに帰するアド説は多少の疑念を惹起しつつも、たとえ本人でなくとも、その影響下にあった人物の手になるものという形でほぼ学会の定説となっている⁴⁰⁾。そのなかに次の一節がある。

「……実体と存在者の彼方の一者は存在者でも実体でも活動でもなく、むしろ活動しているのであり、純粋な活動することそのものである、したがって、存在者に先行する存在そのものである、……「存在」に二義ある、一方の存在は存在者より先在するが、他方の存在は、彼方のものであり絶対的な存在であり存在者のイデアのような一者から導かれる」(93 v 23-33)

ここで確認できることは、『神学』同様、始原は一者であると同時に存在であるという点である。知に関してはどうか。かのものは、「何も思惟しない直知作用のうちにあり」(91 v 16-17)「知と無知の外にある知」(64 v 10-11)とある。神の知とは「他性及び二元性、知と知られるものとの相をあらわすことなく自己自身と不可離であり、…人が無知をかれに認めるにしても、(知との)対立・欠如という意味での無知ではない。…かれは知と無知より優れており、

…かれの知は知られるものを知る者のそれではなく、それ自身という知である」(64 v 19-34)。通常の知を超えた無知、通常の無知と知を超えた知が神に容認されており、「知ある無知」の一つの淵源にこの箇所は数えられるであろうが⁴¹⁾、それはさておき、知を帰属させることは『神学』の立場と一致する。とはいえ、存在者に先行する絶対的存在、二元性を脱した直知作用の指図だけに限って言えば、プロティノスの始原論の基本戦略を継承しているように思える。もしこの見込みが的外れでなければ、『神学』の著者はわざわざポルフェリオスに依存するには及ばなかったであろう。この点に関しては第IV節で考察する。

その前にしかし、上下二つのレベルで現れる存在及び知性の根は同一であるという複雑な形而上学体系が背景に潜んでいることに関知せねばならない。まず、存在が第一、第二の存在に分けられるのに対応して、知性も2世紀後半の書『カルデア神託』(Fr.7)⁴²⁾の第一の知性、第二の知性と同様二通りに分けられる。その一つは「自己自身のうちに入ることができない知性」(90 v 35-90 r 1;bis v 2-4)、もう一つは自己自身に入ることができる知性である。先にみた知と無知を超える知は、当然前者の知性に属するだろう。それに対して後者の知性は自己に還帰し、自己を対象として認識するいわゆる知性である。ところが、これらは別々の知性ではなく、同一知性の二側面(90 r 7-8)とでも言うべきものである。一方の側面では一にして単純であるが、他の側面では「自己自身と異なる」(90 r 5;7)。具体的には原初的存在(*ὑπαρξίς*)、生命、直知作用の三契機として自己分節するという。

「原初的存在においては、直知する者は、また直知されるものでもある。だが、直知されるものへ立ち戻り、自己自身を見るために知性が原初的存在から脱して直知する者へと転ずるならば、直知する者は生命である。それゆえ、生命の面での知性は無限定である。そして、これら(原初的存在、生命、知性)はすべて活動であるが、活動はたとえば原初的存在の面では静止しており、直知作用の面では自己に還帰した活動であり、生命の面では原初的存在から傾いた活動であろう。」(90 r 16-26)

このように第二の知性は、不動の原初的契機から自己分離する生命の契機に移行し、自己還帰し自己直知を果して初めて知性として完成する。プロティノスでは流動的であった三契機がある程度体系化されていることに気づく。

第一知性と第二知性は同一知性の二側面である。すなわち、自己関係し、生命及び直知作用と接続する限りで第二知性として眺められるが、他との接続を断ち切っている限りで第一知性として眺められる。接続するというのは、基準が何であれ同じ枠内に数え挙げることが可能という意味である⁴³⁾。非接続は下位階層からの始原の超越性を表し、接続は階層間の接続を容易にする内在性を基礎づける。一切の人知を超えるとしながらも『カルデア神託』の次の啓示を真として受け入れるのは、豊饒なプロティノスの思想の一端を別の潮流と突き合わせて転調せんとする「ポルフュリオス」の新機軸だと思われる。

「(神は) 自己自身の全てのものから自己自身を奪い去ったと語った人々は、かれの単純性のうちで力と知性…がかれに結びつけられて一つになっていることを認めている。そして、かれらはその三つ組からかれを取り除かないが、数を廃棄すべきだと考え、かれを一と言うことすら完全に拒否するに至る。」(92 r 1-8)

この一節は「父は自己自身を奪い去った」(Fr.3)と「父と力と知性があるとするにせよ、これらに先立つものとしてこの三つ組に先立つ一なる父が存在するだろう。『実際あらゆる世界に三つ組が輝き、三つ組を単子が支配しているのだ』」(Fr.27) 近辺の『カルデア神託』のパラフレーズであると考えられる。神託では父は万物から自己を奪取したのもでもあり、他方三つ組の一分肢でもある。「ポルフュリオス」は神託のレゾン・デートルとでも言うべき矛盾を継承する。第一位のものは数列の始点であることを脱して孤高の存在であると同時に力、知性と同列に三・一構造をなす第二位のものである。始原は接続かつ非接続、内在かつ超越の同時併存である。

以上纏説した精妙な体系は『神学』のどこにも見当たらない。もちろん『カルデア神託』の残響は微塵も感じられない。また、『神学』における始原の作出因的性格の突出は、生命・知性・原初的存在の三つ組から自己を奪い去った

父の側面を形骸化し、ひいては非接続と接続との同時併存という創意をも抹消する方向に進んでいないだろうか。ただ始原に存在と知を認めるという類似性だけを以て、『神学』が「ポルフュリオス」を下敷きにしたとは考えにくい。さらに『エンネアデス』のなかにも始原に存在と知を帰する萌芽があれば、ポルフュリオス-モデル説の蓋然性はより少なくなる。

IV プロティノスの始原論の潜在力

『神学』はトリノの『パルメニデス註解』を参照せずとも、直接『エンネアデス』から始原論を展開できたであろうか。この可能性について考察しよう。プロティノスの始原も存在、知性と名づける余地は皆無なのか。それが可能であれば、『神学』の翻案のためにポルフュリオス介入は必要条件とならない。「善あるいは一について」の一節をヒントにしてみよう。

「自己充足している者が自己を認識せず直知しないからといって、無知が彼に属するわけではないだろう。というのも無知というのは、別のものがあって、一方が他方を知らないときに生ずるのであるから。しかるに、単独であるものは認識もしなければ、無知の対象を有するわけでもない。……しかし直知することも、自己と一体であることも、自己自身や他のものについての直知作用も除去すべきである。というのは、かれを直知する者の側にはなく、直知作用 (*νόησις*) の側に配するべきだからである。ところで直知作用は直知せず、他のものが直知することの原因である。」(VI.9.6.46-54)

ここで明らかに始原に「無知でない」ことが認められ、そのあり様が「直知作用」と敷衍される。しかし、知性ならぬ直知作用とはなにか。すべてを放下することへ誘う(V.3.17.38)徹底した否定の道が通奏低音だとしても、一切払拭の一手手前でロゴスの限界を押し広げる試みがプロティノス哲学のいま一つの魅力である。さて知性においては、直知主体と直知作用が不断に一体ではあるが、理論上にすぎない区分すら拒否した地点に始原は追究される。その際ゾンドの役割を果たすのが「唯一それのみか」というメルクマールである。つまり知性が直知するという定式は、何かがあって、それが直知作用という別の

ものをもつという意に解されかねない。

これを些細な論点だと即断しないためには、「一者の自発性と意志について」の議論を弁えておくといよい。この論放では、一者にすら自由を否定する大胆な論との対決が繰り広げられる。大胆な論の論拠は、たとえ外的拘束がなく本性の発現である活動も、畢竟その本性に内的に拘束されるので自由ではない、なぜなら他者によって決定されたものとして産み出されたのか偶然によるのか、本性の出自が不明であるから。ところで、一者の活動も自己の本性の発揮に他ならない、ゆえに一者すら自由ではないというものであった。それに対しプロティノスは、一者の本性が偶然や他者によって産出されたものではないと示さねばならなかった。彼の解法は第一に、神には本性はおろか活動すら属さないという否定道の完遂、第二は、神は本性なき活動であるという、相手に劣らず大胆な語り口⁴⁴、第三は、神の場合は活動の方が本性を支配する、そしてこれを自己創出と名づけるというものであった。この解法は斬新であるが諸刃の剣であった。というのは活動と本性の二元論に入るゆえに、本来の神語りを逸脱する(VI.8.13.4-5)危険を伴ったからである。ちなみに第四は、活動と本性は概念的に区別されるが実は同一なのだと言明をつけて本性が活動を支配するとする、知性の段階に特徴的な自由の弁明を一者に転用するもの。しかし、知性の本性は一者によって産出され、それが活動へと展開するというのがプロティノスの常套表現である。従って、あたかも本性が活動に先行するかのようには語られる第四の解法は大胆な論を回避しえない。

第三、第四の解法から看取できるように、神に本性を認める立場は避けた方が無難であるというのがプロティノスの戦略であったと思われる。そこで本性なき活動という第二の解法が本来的なのだと言明して本筋に戻らば、知性という本性が直知するという定式を避けて、知性なき直知活動が始原として措定される事情が首肯されよう(VI.8.20.9-15)。知性抜き直知活動ならば、知性と直知活動の二があるとはもはや言いえないからである。

プロティノスの始原を直知作用とすることも不可能ではないと判ったが、次に始原を存在とする方はどうであろうか。存在者(τὸ ὄν)は多であるゆえ知

性には認められるものの、始原については否定されるのがプロティノス解釈の定石ではあるが、存在はどうか。先に引用した「善あるいは一について」の一節を応用するならば、「始原を存在者の側にはなく、存在活動の側に配置すべきである」と言えるのではないか。〈統一化されるもの〉プラス〈一〉という「一なるもの」ではなく、「一そのもの」を始原とするのと同様に、「本性なき活動」という定式中の「活動」のところに直知活動、存在活動、統一化活動と次々に代入するだけのことである。この代入の承認が何を含意するかといえ、一方始原には知性活動、存在活動をも割り当てて構わないということであり、他方「一」という名をこの意味では特権的なものとみなさないということである。ここで「実は始原にふさわしい名は何もない」という趣旨の解法第一の変奏を復唱するには及ばないだろう。むしろ始原が直知活動、存在活動と同列の統一化活動であるということを明示するために「一」という名が特権化したのではないと考えてみよう。

「われわれがそれを名によって互いに指し示すために「一」と名づける必然性があるのは、それを不可分な概念へと導き、魂を統一せんと欲してのことである。」(VI.9.5.39-41)

始原を「一」と名づける後者の理由は今回不問に付し、前者の理由だけをとり上げるならば、始原概念の不可分性すなわち一性が浮上する。そこで一なる始原概念とは何かと言え、主語に述語づけられて主述複合体を構成することのない述語、担うものと担われるものという部分に分析できない概念、たとえば「知性」に述語づけられない直知作用、「存在する・もの」と分析できない「存在活動」のようなものではないか。従って「一」という名は積極的定立ではなく、能う限りふさわしい神名「本性なき活動」を紡ぎ出すためのいわばメタレベルの格率「一なる概念へ！」と理解しなければならない。

「おそらくこの「一」という名も多を除去すること (*ἀπορρις*) なのだろう。それゆえ、ピュタゴラス派の人々は多の否定というつもりで象徴的に「アポッローン」(多ならざるもの)とも、お互いに指し示してきたのである。しかし「一」がもしなんらかの定立であったならば、その名も表示されたものも、

人がその名を口にしない場合以上に不明確なものとなるだろう。おそらくこの名が語られたのは、探求する人が全面的単純性を意味するこの名から出発して最後にはこの名も否定するためであろう。」(V.5.6.26-33)

「一」は肯定的定立ではなく、多を除去する操作を促す符牒である。もし誤って肯定的神名とみなしたら、その「一」は逆に始原理解の蔽いになると、この箇所でも警告されている。存在者、知性、一なるものは、それぞれ存在、直知作用、一性を分取すると解される限り欠如的状态にある。これらは〈自己〉プラス〈他者〉という多である限り自己完結していない。それに対し存在そのもの、直知作用そのもの、一そのものは「ただただそれ自身にして真にそれ自身」(*μόνον αὐτό και ὄντως αὐτό*, VI.8.21.32) という基準を通過するゆえ自足性を有する。それ自身に徹し他のいかなるものをも要さない自足態にあるのは始原だけであって、爾余の一切は自己に他者が付加され(*αὐτό και ἄλλο*, VI.8.21.33) 純度が濁った状態にある。

以上、始原に知の要素、存在の要素を重ね合せることだけに限って言うならば、プロティノスのテキストの潜在力を引き出すこと(タアウィール?)から『神学』は逸脱していない。従って『神学』の無名氏が無名氏『パルメニデス註解』をわざわざ触媒として前提した確率は減少する。だが他方、『神学』が『エンネアデス』の一解釈として始原に知の要素、存在の要素を認めるに至ったのかと問うならば、その答えも否定的にならざるをえない⁴⁵⁾。なぜならプロティノスは始原の単独性を強調するために、たとえば知性から直知作用だけを析出したのに対し、『神学』は知性と区別された直知作用、存在者と区別された存在を認める手続きを経ることなく、むしろ第一の創出者、造物主、第一原因という神名で以て始原を下位の階層との関係性に投げ込む視点に大いに傾いている。その意味で前者は直知作用を知性のレヴェルから語りえぬもののレヴェルへ昇格させているのであり、後者は一者を知性のレヴェルに降格させているのである。

結 び

529年に閉鎖されるアカデメイア最後の学頭ダマスキオスは、『エンネアデス』路線で一者を頂点に冠するプロクロスを跳び越え「イアンプリコスに帰れ」のモットーを以て、一者の上位に「語りえぬもの」(τὸ ἄρητον)を指定した。それは万物の産出を司る一者とは別のものが、産出に没交渉の絶対的に超越した不可認識の始原として要請されたということである。万物を基礎づける始原は万物と異ならねばならない。しかるに、もし始原が認識されるものであったならば、認識されるという点で万物と共通であり、ダマスキオスの用語では連携する(συντάσσεται, R 2.2; 15.17; 19)⁴⁶⁾ことになってしまう。したがって始原は「語りえぬもの」と表示される。プロティノスにおいては産出性と離存性の両性格が矛盾しつつも融合し一つの始原に収斂していた。ところがダマスキオスは、産出性を一者に、超越性を語りえぬものに振り分ける。原因は原因づけられたものと、第一のものは後のものと連携する。また、一者を自らの単純性のうちに万物を溶解し一とする、展開された万物に先立つ統一化された万物と理解する。従って、万有との連携を断ち一切の対立の埒外にあるかのもは一者でも、第一のものでも、原因でもなく、「始原」が他のものの始まり、原理、源を意味するのであれば始原ですらない。「超越する」という表現すら、超越される相関者と関係を有するという誤解を招くならば避けるべきである。複数か単数か確定不可能ゆえに「かのもの」か「かのものども」かも不明であるという。それでも語りえぬものについて語るのは「それ自体ではなく、それをめぐるわれわれの無知と失語をわれわれは論証している、そしてこれこそ論証の対象なのである」(R 11.19-20)というスタンスからであった。われわれの始原をめぐる神語りは無限に転覆(περιτρέπεται, R 7.3; 10; 12.16; 13.21; 15.22; 16.14)を繰り返す。ダマスキオスの辿った道は、プロティノスの豊饒すぎる始原を犀利な論法で解体する作業であった。その結果、始原から作出因という面が剥ぎ取られたのはもちろんのこと、本性抜き活動、活動による本性の創出者、知性なき直知作用などという斬新な定式までもが抜け落ちるこ

ととなった。しかし始原は本来語りえぬものであって、語りえたかぎりの始原とはわれわれ自身の情態 (*τὰ ἡμέτερα πάθη*, R 12.17; 7.6; 10.6; 11.7) の逆照射に他ならないというダマスキオスの文言は、「善あるいは一について」(VI. 9.3.49-54) の引用というか、件の『パルメニデス註解』による引用 (94 v 35-64 v 1; 94 r 27-29; v 3-4) の二番煎じである。プロティノスの始原理解の基底とも言うべき「ただただそれ自身にして唯一それのみ」という始原の純度はアカデメイアの黄昏で研ぎ澄まされることはあっても、濁ることはなかった。翻って『神学』の始原とは言えば、存在者への知をもつ「創出主」「造物主」として被造世界との接続により透明度を落とすことを敢えて為し、『純粹善論』こと『原因論』と同様、後のものどもに対する「第一」の「原因」として活動(能動・制作)の恩恵を分与することを惜しまない。『神学』誕生の土壌は、どこか別のところに見出されるのではないだろうか。

注

- 1) P. B. Fenton, *The Arabic and Hebrew Versions of the Theology of Aristotle*, in : *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages*, London, 1986, p. 241-64.
- 2) M. Aouad, «*La théologie d'Aristote et autres textes du Plotinus arabus*», in : *Dictionnaire des philosophes antiques*, éd. R. Goulet, t. I, Paris, 1989, p. 564-70.
- 3) G. Endress, *Proclus Arabus*, Beirut, 1973 によれば、これらは12世紀クレモナのゲラルドゥスによってトレドで羅訳された『原因論』のアラビア語原典『純粹善論』、及びプロクロスの『神学綱要』211中アラビア語訳で現存する20強の命題の語彙や文体とも共通であり、9世紀前半のキンディーを核とするバグダード翻訳チームに特徴的なものだという。
- 4) F. W. Zimmermann, *The Origins of the so-called Theology of Aristotle*, in : *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages*, p. 130-31 は、イブン・ナーイマによる『エンネアデス』の翻案すなわち原『神学』の成立を9世紀前半とし、『アリストテレスの神学』『ギリシアの賢者の言葉』『神学論攷』その他への9世紀後半の分裂、各々内部での無秩序の原因として写本伝承の「ビッグ・パン」を想定する。イブン・ナーイマは『形而上学』を補完するものとして『エンネアデス』を利用し、プロティノスをアリストテレス哲学の水脈に連なるものとして理解していたのであり、「プロティノス」の名が脱落したのは偶然であるとされる。
- 5) ツイーマン p.120; 132 は、編集・改訂・翻訳・パラフレーズ、要約のような活動

を表現するアラビア語の語彙が、とりわけ初期に悪名高いほど曖昧である事実を指摘する。

- 6) 'A. Badawī, *Aflūṭīn 'inda al-'Arab*, Kuwait, 1977³, p. 3. 6-9. 他に原典は, *Die sogenannte Theologie des Aristoteles, aus arabischen Handschriften zum ersten Mal herausgegeben*, ed. F. Dieterici, Leipzig, 1882, F. Rosenthal, Aṣ-Ṣayḥ al-Yūnāni and the Arabic Plotinus Source, *Orientalia* 21, 1952, p. 461-92; 22, 1953, p. 370-400; 24, 1955, p. 42-66, G. C. Anawati, Le néoplatonisme dans la pensée musulmane : état actuel des recherches, in *:Plotino e il Neoplatonismo in Oriente e in Occidente*, Roma, 1974 (p.339-43 にはアナワーティによる解説が, p. 365-405 にはクラウス校訂のテキストと仏訳があり, p. 386-87 にはバダウィー版との相異 (完全枚挙ではない!) が一覽表で提示されている) を参照。翻訳は, F. Dieterici, *Die sogenannte Theologie des Aristoteles*, Leipzig, 1883, G. Lewis, *A Re-examination of the so-called "Theology of Aristotle"*, St. John Baptist College, 1949, L. Rubio, *Pseudo-Aristóteles, Teología*, Madrid, 1978, P. Henry et H.-R. Schwyzer, *Plotini opera*, Paris/Bruxelles, 1959 のルイス新訳を参照。
- 7) イブン・ナーイマを『エンネアデス』の翻訳者かつ翻案者と解する旗手はツイーマンであり, キンディーを翻案者と推定するのが, 『純粹善論』に関し, *Recherches sur le Liber de causis*, Paris, 1995 で, ギリシア・アラブ思想史研究の最先端を行くダンコーナである (2001 年 1 月 10, 11, 24, 31 日パリ高等実習学院の連続講演「アラブ世界におけるプロティノスの伝承」に基づく。C. D'Ancona, *Pseudo-Theology of Aristotle*, Chapter I : Structure and Composition, *Oriens* 36, 2001, p. 78-112 も参照)。
- 8) P. Thillet, Note sur la *Théologie d'Aristote*, in : *Porphyre. La vie de Plotin*, t. II, éd. L. Brisson, Paris, 1992, p. 625-37 ; R. Brague, La philosophie dans la *Théologie d'Aristote*. Pour un inventaire, *Documenti e Studi sulla tradizione filosofica medievale* 8, 1997, p. 368-69.
- 9) Endress, *op. cit.*, S. 237-41.
- 10) *Vita Plotini* 26. 29-37.
- 11) P. Thillet, Indices porphyriens dans la *Théologie d'Aristote*, in : *Le Néoplatonisme*, 1971, p. 301-2 ; S. Pines, Les textes arabes dits plotiniens et le courant porphyrien dans le néoplatonisme grec, *ibid.*, p. 305-13 ; Endress, *op. cit.*, S. 206-12.
- 12) P. Hadot, La métaphysique de Porphyre, in : *Porphyre*, Vandœuvre-Genève, 1965, p. 130-57 ; *Porphyre et Victorinus* I, Paris, 1968.
- 13) 第一神でなく知性を指す可能性もある。
- 14) ashjār は, ルイスの推測に倣って ashya' と読む。
- 15) 類似表現, 他 2 箇所。
- 16) 類似表現, 他 4 箇所。

- 17) 類似表現, 他 41 箇所.
- 18) 類似表現, 他 6 箇所.
- 19) 類似表現, 他 21 箇所以上.
- 20) 類似表現, 他 35 箇所.
- 21) 類似表現, 他 20 箇所.
- 22) 類似表現, 他 4 箇所.
- 23) 類似表現, 他 15 箇所.
- 24) バグウィー版では「第一知性」となっているが, 最有力写本 *Constantinopolitanus Aya Sofya 2457* に従って読み替える.
- 25) 類似表現, 他 5 箇所.
- 26) 類似表現, 他 17 箇所.
- 27) 母音化はバグウィー版に従わず, *A Greek and Arabic Lexicon* 4, ed. G. Endress & D. Gutas, Leiden/New York/Köln, 1997 を参照.
- 28) 類似表現, 他 18 箇所.
- 29) 類似表現, 他 5 箇所.
- 30) 類似表現, 他 11 箇所.
- 31) プロティノス原文の命令法二人称 *ἴπα* を, 直説法三人称 *ἴπα* に無意識のうちに (ないしは意図的に巧妙に) 読み替えている.
- 32) 類似表現, 他 3 箇所.
- 33) ルイスに従って *al-awwal* と補う. クラウスもここに欠損を認める.
- 34) 最初の箇所に関しては, クラウスに従ってルイスと同様単数形に読み替える.
- 35) 類似表現, 他 9 箇所.
- 36) 類似表現, 他 2 箇所.
- 37) *a'lam* を *a'lā* と読み替える. ルイスの “loftier” という訳は同じ読みだと思われる.
- 38) 類似表現, 他 3 箇所.
- 39) 5世紀末から6世紀始めに遡る羊皮紙 94 葉中 7 葉に筆記されていた. トリノ大学国立図書館に所蔵されている間, 1873年ペイロンにより公表, 78年シュトゥーデムントの解説, 碩学数人の校閲を経て, 92年に批判校訂版 (W. Kroll, *Ein neuplatonischer Parmenidescommentar in einem Turiner Palimpsest*, *Rheinisches Museum* 44, S. 599-627) として結実した. しかし, 1902年1月25日夜から26日にかけての火災で灰燼に帰した. その後, 68年のアド版が権威をもち続けたが, いまや *Commentarium in Platonis «Parmenidem»*, ed. A. Linguisti, in: *Corpus dei papiri filosofici greci e latini Parte III*, Firenze, 1995, p. 63-202 が底本とされるべきである.
- 40) アドに対する大胆な挑戦は, 99年の G. Bechtle, *The Anonymous Commentary on Plato's «Parmenides»*, Bern/Stuttgart/Wien を待たねばならない. かれは同註解の学説がヌーメニオスを典型とする中期プラトン主義と共通であり, プロティノスとの類似

は、同註解を含んだ中期プラトン主義からプロティノスへの向きで説明されるべきであるという新説を提示したが、M. Zambon, *Elenchos* 20, 1999, p. 194-202 で即座に批判された。それでもなお、ベヒトレ (*The Question of Being and the Dating of the Anonymous Parmenides Commentary*, *Ancient Philosophy* 20, 2000, p. 393-414) は自説を曲げない。アドの路線の踏襲としては、M. Zambon, *Porphyre et le moyen-platonisme*, Paris, 2002 があり、2002 年 9 月 26~30 日プラハで開催された同註解を巡る学会でも、ポルフェリオスの影響はベヒトレ以外の碩学によって確認された模様である。

- 41) ポルフェリオスの真作 *Sententiae ad intelligibilia ducentes* 25. 2 でも知性の彼方のものに「直知作用より優れた無知」が認められている。
- 42) 底本は、*The Chaldean Oracles*, ed. R. Majercik, Leiden/New York/Köln, 1989.
- 43) 『哲学史』(*Porphyrii philosophi fragmenta*, ed. A. Smith, Stuttgart/Leipzig, 1996, 223 F. 16-17) では「連接」「算入」という語が使用され、本註解では「並置」(94 v 29), 「関係」(94 v 30; 31) とその対の「非連接の」(94 r 7), 「無関係の」(94 v 11), 「比較不可能な」(64 r 20), 「非結合の」(90 v 23) が用いられる。
- 44) この第二の解法が『パルメニデス註解』と『神学』を双方に影響を投じているゆえ、ポルフェリオスの媒介は不要であると指摘したものに R. C. Taylor, *Aquinas, the Plotiniana Arabica and the Metaphysics of Being and Actuality*, *Journal of the History of Ideas* 59, 1998, p. 217-39 がある。しかし、本性なき活動を析出するプロティノスの志向は『神学』のそれとは正反対なので、『エンネアデス』の一解釈として『神学』の始原観が無媒介で成立したとは私は考えない。なお p. 234 でアームストロング訳を踏襲して、VI. 8. 20. 10 の二箇所の“*ὑπόστασις*”を“existence”と訳するのは早計ではないか。
- 45) C. D’Ancona, *Divine and Human Knowledge in the Plotiniana Arabica*, in: *The Perennial Tradition of Neoplatonism*, ed. J.J. Cleary, 1997, Leuven, p. 429-42 は、プロティノスの学説のアリストテレス主義化が進行しているとみる。P. Adamson, *Aristotelianism and the Soul in the Arabic Plotinus*, *Journal of the History of Ideas* 62, 2001, p. 211-232 も同路線。
- 46) 『第一の諸始原についてのアポリアと解』の底本には Damascius, *Traité des premiers principes*, éd. L. G. Westerink, Paris, 1986 を用い、引用箇所の手示は慣例により Damascius Successor, *Dubitaciones et solutiones de primis principiis*, ed. A. Ruelle, Amsterdam, 1966 (Paris, 1889) に従う。